

Gram-negative rod bacteremia after cardiovascular surgery: Clinical features and prognostic factors

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田子, さやか メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/31559

主論文の要約

Gram-negative rod bacteremia after cardiovascular surgery: Clinical features and prognostic factors (心臓血管手術後のグラム陰性桿菌による菌血症に関する研究)

東京女子医科大学感染症科

(指導：菊池 賢教授)

田子さやか

J Microbiol Immunol Infect. published online August 28, 2015,

DOI:10.1016/j.jmii.2015.07.008

【目的】心臓血管手術後のグラム陰性桿菌による菌血症の臨床状況、予後不良因子などを調査する。

【対象および方法】

2004年4月から2013年3月に東京女子医科大学病院において、心臓血管手術後100日以内にグラム陰性桿菌による菌血症を発症した成人を対象とし、診療録を用いて後方視的に検討した。グラム陰性桿菌以外の細菌による菌血症が併存している症例は除外した。

【結果】

心臓血管手術を受けた2,017人中78人がグラム陰性桿菌による菌血症を発症した。グラム陰性桿菌は *Klebsiella*、*Pseudomonas aeruginosa*、*Enterobacter*、*Escherichia coli* が多かった。手術は人工血管置換術が最も多かった(44.9%)。周術期の予防的抗菌薬はアンピシリン/スルバクタム(76.9%)、バンコマイシン(12.8%)であった。90日死亡率は21.8%であり、Acute Physiology and Chronic Health Evaluation (APACHE) II スコアの平均値は15.6(3-39)であった。術後6日

以内にグラム陰性桿菌菌血症を発症した患者は生存群で 23.1%に対し死亡群で 47.1%であった ($P = 0.0603$)。グラム陰性桿菌菌血症の発症日から 30 日以内に、同じ種類のグラム陰性桿菌が血液以外の検体から検出された患者は 34.6%であった。多変量解析では、*P. aeruginosa* 菌血症 (odds ratio [OR] 175)、APACHE II スコア ≥ 25 (OR 76.2)、予防的抗菌薬バンコマイシン (OR 45.4) が心臓血管手術後のグラム陰性桿菌菌血症による死亡の有意な予後不良因子であった。

【考察】

心臓血管術後の菌血症は、縦隔洞炎などの創部感染やカテーテル関連血流感染症の起原菌であるグラム陽性球菌が多いと考えられている。本研究では心臓血管術後の菌血症の約 31%がグラム陰性桿菌であり、術後早期のグラム陰性桿菌菌血症は特に予後不良であることを報告した。また喀痰などの血液以外の検体から検出されたグラム陰性桿菌は、血液培養から検出されるグラム陰性桿菌を推測できる有益な指標となることを示した。心臓血管手術後のグラム陰性桿菌による菌血症を対象とした臨床研究はこれまでに行われておらず、心臓血管手術後の患者予後をさらに改善する上で貴重な報告である。

【結論】

心臓血管手術後のグラム陰性桿菌菌血症の患者の手術は、人工血管置換術が最も多かった。心臓血管手術後に状態が不安定な患者に菌血症が疑われる場合は、初期治療として *P. aeruginosa* を含むグラム陰性桿菌をカバーする抗菌薬を選択することを検討すべきである。